



買い物弱者^{ゼロ}をめざして



取組みの背景・課題

スーパーが1軒しかない中野地域の連合町会長から「高齢者が買い物に行けず困っている」と相談を受ける。また、関係機関からも「自転車に乗れなくなり買い物に行けなくなると介護保険を申請する人が多い地域である」という情報があった。

アンケート調査によると、「スーパーが遠く買い物に行けない」「誰かに頼まず自分で買い物に行きたい」「一度に少量しか買い物できない」という課題を感じている住民が多いことがわかった。



取組みの目的・ねらい

- ニーズを正確に把握し、課題を解決できる支援を地域住民とともに考え、実施する。
- 柔軟な発想で、課題解決に必要な団体と連携する。



内容・プロセス

ニーズ把握

買い物に関するニーズ把握のためのアンケート調査を実施。自由記述欄への記述が多く、スーパーが遠いことへの切実な思いが把握できた。

住民の意見を集約

地域住民と生活支援コーディネーターが協議を重ねる。地域住民が出した結論は「行商のようなサービスがあれば、スーパーが遠くても安心」「地域を回る人は、地域のことや高齢者をよくわかっている人がいい」の2点だった。

移動スーパー営業開始

地域住民の願いを実現するために、生活支援コーディネーターが複数の企業に打診したところ、「販売員（販売パートナー）を見つけてもらえたら、移動スーパーの営業ができる。」という回答を得られた。区社協が販売パートナーを発掘し、移動スーパー「とくし丸」の都島区での営業につなげた。



地域住民が意見を出し合い、買い物弱者への支援方法を考えた



「とくし丸」での買い物。自然と会話がうまれる。ゆるやかな見守りにもつながる

事例概要

買い物に困っているという地域住民の声を把握し、調査や話し合いの場を積み重ね、移動スーパーによる買い物支援を実現した。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 地域住民を対象に、買い物についてのアンケート調査と戸別訪問による聞き取り調査の実施
- 企業と地域住民の仲介役となり、買い物に困っている地域での移動販売（移動スーパー）の営業を実現
- 買い物に困っている地域住民や関係機関への移動スーパーの周知

販売パートナーは、区内の元ケアマネジャーである。買い物弱者の抽出にもれがないようにするために、地域住民と区社協と販売パートナーと一緒に販売ルートを作った。また、区社協職員と販売パートナーが、中野地域とその他の地域（大東、淀川、高倉、内代、東都島、桜宮）の戸建住宅を戸別訪問し、ニーズの掘り起こしをした。結果、中野地域以外にも買い物弱者が数多くいることがわかった。現在7地域で200人以上の住民が「とくし丸」を利用中である。



生活支援体制整備事業の広報紙

現時点での到達点（結果・効果など）

普段交流の少ない「新築マンション住民」と「以前から居住している地域住民」が、「とくし丸」での買い物をきっかけに定期的に顔を合わせ、コミュニケーションがうまれている。

また、地域包括支援センターなどの支援を拒否している独居高齢男性が、「とくし丸」を利用中。販売パートナーが安否確認をしたり、近隣住民がさりげなく声をかけたりしている。

これらのように、「とくし丸」は単に物品を販売するだけではなく、コミュニティの構築、ゆるやかな見守りなどの一翼を担っている。

生活支援コーディネーターとしての思い

はじめは、移動スーパーの誘致は無謀に思われました。さまざまな意見もありましたが、他部署の区社協職員が加わり全面的に協力してくれたお陰で実現できました。先日、中野地域の住民から「買い物に不便なのは、どうしようもないと思っていた。諦めていた。まさか移動スーパーが来てくれるなんて」と言ってもらい、この支援は間違えていなかったと確信できました。

「販売パートナーをしてくれる人なんてなかなか見つからない。たまたま見つかったからうまくいったのでは」と思う方もいるかもしれませんが、これも区社協職員が平素からネットワーク構築をしていたことが大きな要因です。「地域住民の熱い思い」「区社協職員の地道な活動」「販売パートナーの地域課題解決への関心」どれが欠けても実現しなかったと思います。

現在も、「買い物に困っている人がいる」という情報が地域住民から寄せられています。まだ周知が足りていないと思います。これからも周知を継続しておこない、買い物弱者をゼロをめざします。

（佐々木）





買い物支援で コミュニティづくり



取組みの背景・課題

区内の高齢者に対し実施した生活課題に関するアンケートの結果、「買い物」について何らかの困りごとを抱えているという意見が多数あった。さらに、協議体においても、概ね同様の意見があったため、まずはアンケート結果において特に多かった地域に限定し、モデル実施することとなった。

また、担い手不足といった課題も存在することから、「ふれあいマルシェ」を実施することで、利用者のみならず地域住民全体への取組みの周知となり、新たな担い手確保につながればという背景もあった。

当該年度（平成 30 年度）が、地域福祉活動計画（第 2 期）の策定年度でもあり、「ふれあいマルシェ」を計画に組み込むことで、高齢者の孤立防止や世代間交流の場へと派生させていきたいという地域の思いもあった。



協議体会議での買い物支援の
グループワークの様子



取組みの目的・ねらい

- 買い物困難な方への支援
- 閉じこもりがちな高齢者の外出のきっかけ（引きこもり予防）
- 見守りを兼ねてのコミュニティづくり（お互いで気にかけて合うような場）
- 新たな担い手の育成



内容・プロセス

生活の中での課題出しから支援の実施

普段から地域行事に参加している区内の高齢者へ生活課題に関するアンケート調査を実施した。また、協議体会議においても、高齢者が抱える生活課題を出してもらう。共通して「買い物」が課題となり「買い物支援・移動販売」の実施に向けて取り組んでいくことを決定。アンケート結果で特に意見の多かった三先地域（地域内にスーパーがないなどの課題を抱える）をモデル地域とし、食事サービスの後の時間などを利用して集まってもらった地域の会長及びボランティアへの趣



ふれあいマルシェでの買い物の様子

事例概要

協議体会議で、買い物に関する課題解決に向けて「ふれあいマルシェ」開催について検討。実施地域について、スーパーが1件もない「三先地域」にしばり、地域に打診。会長や地域見守りコーディネーター、地域ネットワーク委員をはじめとするボランティアの理解を得て、平成31年1月から開催することとなった。翌年度からは、毎月のふれあい喫茶時と、年2回の地域行事とのコラボも計画。買い物支援だけでなく、見守りも兼ねての支え合いのコミュニティづくりの場となっていくことが目標となっている。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 区内の商店街や買い物支援を実施している事業者との情報収集・課題の聞き取り
- 事業者（ふれあいマルシェ）がおこなう他地域の取組みを見学し、地域役員やボランティアへ紹介
- 地域ネットワーク委員が訪問時に渡せるチラシや掲示板に貼るポスター等の広報物の作成（月末に配布）
- 他地域の見守りコーディネーター、地域包括支援センター、ランチ等への情報提供

旨説明や買い物支援に向けた提案をして理解を得る。

当初、次年度のふれあい喫茶と同時に、「ふれあいマルシェ」と題した移動販売を開催することとしたが、試験的に開催をした結果、大変好評であったため、予定より早い当該年度1月からの開催となった。また、地域で策定した第2期地域福祉活動計画や、地域活動協議会の事業にも盛り込み、年2回の地域の行事としてコラボ開催することも計画立てた。

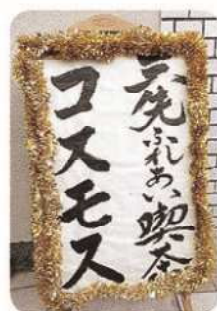


ふれあいマルシェでの買い物の様子

地域の見守り・コミュニティの場づくりと担い手育成

地域のネットワーク委員が、高齢者宅へ「ふれあいマルシェ」の周知チラシをもって訪問し声かけすることで見守りにつなげている。地域内の要支援者でもある認知症の方も、夫婦一緒に来て買い物を楽しんでいた。このように、単に買い物支援とするだけでなく、引きこもり予防・見守りの場となっていくことを見据えている。

また、ふれあい喫茶と同時開催することにより、買い物ついでにお茶を飲んでもらうことができて（その逆もありうる）、つながりの場の発展にもなっている。当初からあった担い手不足といった課題に対しても、若い人たちへの呼びかけや、周辺施設への周知などで興味・関心を高める工夫をして新たなボランティアや参加者の発掘・募集をおこなっていく予定である。



ふれあい喫茶の様子

現時点での到達点（結果・効果など）

- 地域の会長やボランティアの協力を得て、「買い物支援」の場が開催できた。
- 地域の会館に今まで来たことのない方が参加してくれていた。（特に1回目の実施時には15人の住民が初めて会館を訪れた）
- 集いの場として広がる可能性が大きい。



生活支援コーディネーターとしての思い

認知症の方が増えていることもあり、買い物を通じて「声をかけあえる・見守り」の場となるよう継続していきたいです。地域から意見があった「買ったもので料理教室をしたい!」との声も実現したい。他でも買い物支援が必要な地域があるので、良いモデル地域として、買い物支援の輪を広げていきたいと思っています。

（西村）

※発行（令和元年8月）時点の生活支援コーディネーター：久保



生活支援活動“きづくちゃん 「たすけ愛」活動の会”の活動 者増加に向けた取組み



取組みの背景・課題

きづくちゃん「たすけ愛」活動の会は、会員同士で暮らしの困りごとを有償により助け合う会（東成区独自の活動）。年間 500 件以上の困りごとが解決されている。平成 27 年 4 月に同会が発足し、活動開始。同会の活動者は、平成 27 年度末 26 人、28 年度末 26 人で増えず、利用依頼に応えられないこともあった。



普段の助け合いの様子(庭木の植え替え)



取組みの目的・ねらい

- 活動者が増加することで、活動者の役割や外出のきっかけになり、活動者自身の介護予防につなげる
- 活動者が増加することで、利用依頼に応えられるケースが増え、依頼者の生活の質の維持・向上を図る



内容・プロセス

生活支援コーディネーターとして会員の主体的な活動を支援

同会では、2 か月に 1 回「会員のつどい」をおこない、活動の中で工夫していることや困ったことなどを情報交換している。

生活支援コーディネーターもこの会に参加し、区内の福祉や医療に関する情報提供をおこなっている。また、活動課題の共有や、課題解決に向けた取組みを会員が主体的に企画できるようにはたらきかけている。

いろいろな方法で会の周知活動を実施

平成 29 年 3 月～	地域福祉活動の場で周知活動
平成 29 年 5 月、30 年 1 月	活動者が講師になった講座開催
平成 29 年 7 月～	活動 P R プレート作成
平成 29 年 11 月、30 年 11 月	福祉まつり「ふれあい広場」で周知活動
平成 30 年 3 月	活動 P R T シャツ作成
平成 30 年 7 月～	「知って得する連続講座 介護予防編」で活動紹介
平成 31 年 1 月	活動 P R 動画作成



活動 P R プレートの作成

事例概要

活動者主体の活動者増加に向けた取組み。地域福祉活動に出向いた周知活動や、活動者が講師となる講座、広報物の作成などをおこなった。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 区内の支え合い活動や高齢者の生活課題などの情報提供による、活動者主体の課題解決に向けた協議の場づくり
- 「会員のつどい」で企画した取組みの実現に向けた、講座や周知など活動の場の設定

専門職にまじって、全校下で講座を開催

「知って得する連続講座 介護予防編」は、区役所主催の講座。生活支援コーディネーターも参加している包括的支援事業担当者等が集まる場（包括的支援事業連絡会）で企画した。この場で、きづくちゃん「たすけ愛」活動の会の課題と活動することによる活動者の変化を共有し、この講座では同会の活動者増加も1つの目標に設定。全11校下で開催し、区内の専門職にまじり、活動者が活動報告をした。



知って得する連続講座



活動者が講師の講座

現時点での到達点（結果・効果など）

- 平成27～28年度には26人で横ばいだった活動者が57人に拡大（平成31年1月現在）。介護予防につながっている活動者が増え、利用依頼に応えられるケースも増えた。
- ある活動者は、「他に困っている人がいるかもしれない」という思いで、自宅マンションの自治会で見守り活動を始めたり、「安心して暮らしてほしい」という思いで、区内の福祉に関する情報を積極的に発信したりされている。一人ひとりの困りごとを解決する助け合いの生活支援活動が、みんなのための活動になり、支え合いの地域づくりにもつながっている。

生活支援コーディネーターとしての思い

会員のつどいに参加して、活動者は「お互い様の助け合いを広げたい」という思いで活動され、「活動を通じて人とつながり、元気になれる」ということがわかりました。会員の思いを大切に、この思いを広げることが支え合いの地域づくりにつながると信じています。

活動者や区、専門職と「助け合いを通じて元気になる人を増やしたい」という思いを共有しながら、助け合いが充実する地域に向けて、一緒に取り組んでいます。（島岡）





5-1

元小規模多機能型居宅介護 を活用した喫茶立上げ



取組みの背景・課題

ひかり天神橋えんの管理者は、高齢者に限らず、地域の方に事業所として何か貢献できることはないか模索していた。一般的な喫茶店などで多くの高齢者が過ごしていることに着目。小規模多機能型居宅介護の閉鎖に伴い、空きスペースを地域の憩いの場として活用してもらえるように、喫茶を開催したいという思いがあった。



取組みの目的・ねらい

豊仁地域のふれあい喫茶は、月1回会館で開催され、非常に活気あるものになっているが、それ以外の地域住民向けのサロンや会館より離れた場所での居場所はないため、新たな居場所としての活用が期待される。



内容・プロセス

管理者の思いを地域へ

平成30年7月初旬、豊仁地域に所在する小規模多機能型居宅介護「ひかり天神橋えん」の管理者より、事業所を7月末で閉鎖するので、空きスペースを活用した喫茶を立ち上げたいとの相談が区社協に入った。生活支援コーディネーターから、豊仁地域社協の会長に管理者の思いを伝えたところ、非常にありがたい話であるとの返答を得る。

7月27日に、「ひかり天神橋えん」にて事業所の利用者向けの喫茶が開催され、地域社協会長、民生委員、地域福祉コーディネーター、CSW、生活支援コーディネーターで見学に行く。その際、地域社協会長より管理者に、豊仁地域の高齢者食事サービスは毎回90人ほど参加しているので、9月の食事サービスで簡単なアンケートを実施し、喫茶立ち上げの参考にしたいとの提案をいただいた。

「ひかり天神橋えん」の管理者、ケアマネジャー、地域福祉コーディネーター、生活支援コーディネーターで話し合いを重ね、地域福祉コーディネーターが主となり、アンケートを作成した。

事例概要

豊仁地域に所在する元小規模多機能型居宅介護事業所である「ひかり天神橋えん」の管理者から、空きスペースを活用した喫茶開催について相談が入る。地域社協会長の提案で高齢者食事サービスにて喫茶についてアンケートを実施。地域福祉コーディネーターとも連携し喫茶を立ち上げた。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 元小規模多機能型居宅介護「ひかり天神橋えん」との連携
- 豊仁地域社協・地域福祉コーディネーターとの連携
- アンケートによるニーズ把握

地域の高齢者の思いを形に

9月の高齢者食事サービスにて、参加者に対して喫茶のアンケートを実施。内容は計5問からなり、喫茶の開催頻度、曜日、時間帯、メニューとその料金などの希望を尋ねた。90人の参加者のうち、54人から回答を得た。月1回程度の頻度で、水曜日の午後を希望する方が一番多かった。

「喫茶ひかり天神橋」のスタート

平成30年11月から、第1水曜日の午後1時～3時に「喫茶ひかり天神橋」がスタートすることになる。これに伴い、まずは生活支援コーディネーターが10月の高齢者食事サービスでアンケート結果と喫茶の周知をおこない、その後は管理者自ら、ふれあい喫茶等で周知活動をおこなった。

11月7日に、第1回目の「喫茶ひかり天神橋」を開催。地域の方は6人が参加。その他、同一建物に併設されているグループホームの入居者や、小規模多機能型居宅介護の元利用者とその家族など、さまざまな方が参加し、活気のあるものとなっていた。幸先のいいスタートを切ることができた。



「喫茶ひかり天神橋」の様子



喫茶メニュー



この場所で活気ある交流
がおこなわれます

現時点での到達点(結果・効果など)

「ひかり天神橋えん」は2月から、認知症対応型通所介護として運営開始した。今後は、認知症の方やその家族にも利用していただける喫茶をめざし、認知症カフェとしての運営に向けて調整中である。



生活支援コーディネーターとしての思い

「ひかり天神橋えん」の職員をはじめ、豊仁地域住民の方など、さまざまな方々の協力を得て「喫茶ひかり天神橋」は生まれました。この取り組みに関われたことに感謝するとともに、今後も豊仁地域の新たな憩いの場として長く活用されることを願っています。(沈)



居場所

5-2

囲碁・将棋サロン
立上げについて

取組みの背景・課題

- 区内で催しをしても高齢男性の参加率は低く、男性は地域との関わりを拒む傾向にある。その一方で、公園や老人福祉センターでは、特定の男性が集まり、興味のある活動をしている。その中で囲碁や将棋をしている男性が多く、好きな人は他にも多いのではないかと考え、一部の人だけではなく、誰もが参加できるサロンを検討する。
- 初心者へ教えるということが難しい趣味であり、囲碁や将棋に対する各々の思いの違いもあって、一つにまとめていくには時間がかかるという面がある。



取組みの目的・ねらい

- 男性が参加しやすい集いの場を提供する。
- 男性の居場所だけではなく、こどもから高齢者までが集い、世代間交流できる場とする。
- 初心者の方でも、認知症の方でも、好きなことならやりたいという想いを大切に、どなたでも受け入れる場とする。



内容・プロセス

ニーズ調査

- 区内で囲碁、将棋を実施している場所・情報を集め、ニーズ調査をおこなった。

区社協の他部署との連携

- ボランティア担当に相談し、サロンを始める前にボランティア養成講座として、「初心者向けの将棋教室」を開催。参加者（こども～高齢者）を集めた。
- 老人福祉センターへ出向き、サロン運営に協力していただける方を募る。老人福祉センター職員から活動者（運営協力者）を紹介してもらったり、実施前には周知チラシを配布・設置した。

運営協力者への事前説明
[平成30年2月1日]

(初心者向け) 将棋教室 [平成30年2月24日]

事例概要

区内の高齢者に関する地域課題のうち、「高齢男性の集いの場が少ない」「定年退職後の男性は自宅に閉じこもり傾向にある」という点に着目し、男性の興味が持てる居場所づくりを検討。区内で囲碁・将棋を実施している男性が多いことから、「囲碁・将棋サロン」を区在宅サービスセンター（区社協）で平成30年3月より毎月2回実施している。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 区内の囲碁・将棋活動者の状況調査
- 老人福祉センターでの活動者へ運営協力を依頼し、事前事業説明を実施
- 運営協力者とともに、サロン実施に必要な支援をおこなう

自主運営に向けて

- はじめに運営協力者を集めて、趣旨説明などをおこない、協力への賛同を求めた。ボランティア養成講座当日にも、講座の補助に入ってもらい、サロン開始前より意識をもってもらうように心がけた。
- 参加者を増やす方法として、区在宅サービスセンターの催し（きらめきパーティー）の中で、囲碁・将棋体験コーナーを作り、地域住民へ自分たちの活動紹介も含めて協力してもらうための場を設けた。

現時点での到達点（結果・効果など）

- 立上げから1年経過し、平成31年3月現在までの実参加人数は計75人となっている。1回限りの参加者もいるが、毎回20人前後の参加者があり、継続実施できている。（こどもの参加者はまだまだ少ない）
- 元々将棋好きな認知症の女性が、夫とともに毎回参加。駒を動かすことは今でも覚えておられ、フォローしてもらいながら楽しんでいる。介護疲れのある夫もこの場では、他の相手と対局でき、日頃のストレスを少しでも発散できる場になっている。
- 現在進行中のサロンであり、完全に自主運営といえるまでには、まだ至っていない。



きらめきパーティー（体験コーナー）
[平成30年11月10日]



囲碁・将棋サロンの様子

生活支援コーディネーターとしての思い

普段交流することのない人々が、囲碁・将棋を通して集まり、お互いに教え、教えられるそんな優しい空間をめざして取り組んでいます。

完全な自主運営とはまだ言えませんし、運営にあたっての課題も多々ありますが、毎回参加者がいて、楽しみにしているというお声も聴かれるので、参加者皆さんとともに、より良いサロンをめざして続けていきたいと思っております。

（藤田）

※発行（令和元年8月）時点の生活支援コーディネーター：宮村





5-3



地域のお宝発表会



取組みの背景・課題

協議体で、生野区の現状や今後の方向性を踏まえて、「支え合い活動&お宝発表会」に取り組もうと話合ったことから企画した。



取組みの目的・ねらい

介護保険サービスとご近所とのつながりに「日常の支え合い」や「地域支え合い活動」のような地域のお宝をうまく組み合わせて、地域づくりをめざすためのきっかけとする。



内容・プロセス

「支え合い活動って何だろう？地域のお宝発表会」開催までの流れ

①協議体で「支え合い活動やお宝発表」を企画

生野区は市民活動が活発。小地域単位で問題を解決しあっていることも多い。そのお宝を介護保険サービスとご近所とのつながりに「日常の支え合い」や「地域支え合い活動」のような地域のお宝をうまく組み合わせて、地域づくりをめざす講演会をしようと企画することとなった。

②地域のナチュラルコミュニティサロンを調査

区内の5団体のサロンに協議体メンバーと一緒に取材へ行く

③“ご近所福祉クリエイター”の酒井保先生を講師に迎えて「支え合い活動&地域のお宝発表会」を開催

住民主体の生活支援・介護予防の取組みを進める

講演会終了時にアンケートを実施。その結果をもとに、「この地域で、こんなことをしてみたい」という人と協議の場を持ち、生活支援・介護予防を進めていく予定。



酒井保先生による支え合い講演会



異西第四振興町会によるお宝発表会

事例概要

平成31年3月14日（木）に、「支え合い活動ってなんだろう？&地域のお宝発表会」を開催。この場は協議体の一環として位置づけた。生野区にあるナチュラルコミュニティサロンの参加者による活動発表をおこなうとともに、地域の人に生活支援コーディネーターを広く知ってもらう機会とした。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 地域のチカラを発見する（地域のお宝さがし）
- 地域づくりの基礎部分を地域の人と一緒に進めていく

現時点での到達点（結果・効果など）

結果 講演会&お宝発表会にて住民主体で「支え合い活動がしたい」という方に、連絡先をいただいた。今後その方々と「どんな地域にしたいか」「どんな取り組みがしたいか」など協議の場を持つ予定。住民主体で介護予防・生活支援を進めていきたい。

効果 ご自身の活動が、「支えられ・支え合っている」ことに

気付いたと驚かれていた。「自分たちの活動が宝と知った」「発表できる場があることが嬉しかった」「継続して今後も取り組んでいきたい」という「やる気」につながったことがうかがえるご意見もいただいた。

今後に向けての課題 今回の開催にあたっては、生野区内で、ナチュラルコミュニティサロンをうまく発見できる仕組み作りができなかった。また、日程調整がうまくいかず、地域の人に十分見てもらえなかった。

発表された5つの「お宝」

異西第四振興町会 (異地域)	週1回、メンバーがそれぞれ役割を持ちながら、おしゃべりを楽しみ、その後は百歳体操を実施している。
たつみおでかけ支援の会 (異地域)	異地域の有志のボランティアが、自家用車を使って同じ地域に暮らす方のおでかけ支援をおこなっている。
北鶴橋サロンあすなろ (北鶴橋地域)	月2回集まり、ボランティアさん手作り食事、ゲーム、体操などを楽しむ。立上げから25年経過。
90歳以上限定お話し広場 (勝山地域)	「昔の話をしよう!」をキャッチフレーズに月1回開催。現在最高高齢の参加者は101歳。
洋装店きくち (東中川地域)	92歳の店主・菊池さんのもとに、近所の人が世話話や相談にやってくる。自然発生的なサロンのような場。

生活支援コーディネーターとしての思い

住民による支え合いの本質は、「制度で」できなくなったことを地域で支えてあってください」ではなく、「お互いの暮らしぶりの中で」できなくなったことを支えあうことだと思います。この軸がぶれないよう地域のチカラを支えていけたらと思います。

この講演会では「支えられる人」が実は「支える側」だったという点が発見できたことがとても印象に残りました。今後は地域で実際に動いている組織をつなげてネットワークを作っていくことに取り組んでいきたいです。

(福田)





居場所

5-4

定年後の男性が 参加しやすい場づくり



取組みの背景・課題

地域福祉支援員が日頃住民と関わる中で次のような経験が背景となっている。

「高齢の男性で地域の取り組みに誘っても参加されず、しばらく経って認知症が進行していた方が居た。ふれあい喫茶や食事サービス等は女性参加者が多く、男性は誘っても参加されない方や一度来ても継続につながらない方が多い」

「認知症がかなり進んだ状態で汚れた服を着て歩いていても、知らない人だと“ちょっと変わった人やな”と声をかけないままになる。相手が知っている人なら声をかける。特に男性は定年後の地域デビューが難しい。気軽に知り合える場ができれば」



取組みの目的・ねらい

- これまで「地域」「近隣」と関わりのなかった人がつながるきっかけをつくる
- 住民同士の知り合いの輪を広げ、普段の相互の見守りや災害時の助け合いにつなげる
- 男性が気軽に参加できる場づくりを通して、暮らしの中に楽しみや張り合いが持てて健康的に暮らせるようになる



内容・プロセス

鯉江東地域

地域福祉支援員が、健康麻雀講座（区社協主催）への参加や、地域福祉支援員連絡会での情報交換・他区の視察を経て、①健康麻雀の会（性別関係なし）②男性カフェを実施することを発案。①に向けては、平成 30 年 7 月に区社協善意銀行助成金で申請し、10 月に憩いの家で健康麻雀講座を開催。11 月より健康麻雀の会を立ち上げる。希望者多数により平成 31 年 2 月より月 2 日回開催とし、現在実施中。

②は、平成 30 年 11 月にスターバックスによるカフェ講座実施（受講者は地域福祉支援員が指名）、12 月に地域役員（町会長・民生委員）にカフェの目的を伝える回が実施され、1 月に本格的にオープン。月 1 回実施中。



鯉江東地域「おとこだてカフェ」
珈琲を淹れる様子

事例概要

平成 30 年度、区内 2 地域（鯉江東地域と関目地域）で定年後の男性が参加しやすい場づくりが進んでいる。鯉江東・関目地域それぞれ地域福祉支援員（区独自に校下単位で配置）を中心として、その地域の状況にあった取組みや進め方を検討・模索していく過程を支援している。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 課題から取組みにつなげるきっかけづくり（聴き取り・視察・情報提供等）
- 各地域に応じた必要な場面での支援（助成金申請・講師調整・必要物品の貸出等）
- 個別支援をおこなう機関（地域包括支援センター、ランチ、オレンジチーム、見守り相談室）との連携

関目地域

東成区で取り組まれている、男性が参加・活躍できる場づくり（3 地域）を地域福祉支援員、区社協 地域支援担当、生活支援コーディネーターで視察。検討の結果、関目地域では将棋や囲碁、麻雀等、男性が興味・関心のありそうなプログラムを通した男性限定の場づくりをすることとなる。



関目地域「男カフェ」プレオープン日の様子

現時点での到達点（結果・効果など）

鯉江東地域

①健康麻雀の会では、既存の取組みにはなかなか来られなかった方（認知症の症状がある方・電動車いすを使用されている方・目が不自由な方等）が参加されたり、はじめ参加者だった男性が自らボランティアとして設営や補助に回ったりされている。別の地域からも男性がボランティアに来られるなど、地域を超えたつながりも生まれている。

②男性カフェについては、会館の場所も知らない・地域のことをまったく知らないという男性が掲示板を見て参加され、新たな広がりを見せている。「男性から男性に」「よく知る町会長から」声かけをすることで、参加のハードルが下がっているように見える。

地域の新たな顔の見える関係、男性の活躍の場につながっている。

関目地域

平成 31 年 3 月にプレオープンをおこない、10 人程の男性が参加。見守り相談室、地域包括支援センターが関わっている方が参加されたが、関わっている職員が終了時間間際までその方が来ていることに気づかないほど容姿をきれいに整えて来られた。他にもお洒落をして来られる方がおり、その場に居る時だけでなく、来るまでの準備も含めて生活のメリハリが生まれていることを実感した。「さっき一緒に囲碁してたのはどこの人？」「〇〇町会の人で、△曜日は□□病院に通ってるんやて」と自然につながりの輪を広げられていた。



生活支援コーディネーターとしての思い

上記の到達点から、一つの場がその場だけでなく暮らしにまでもたらす効果や可能性を実感しています。問題から課題意識、そして取組みへとつながっていく過程で、その人や地域の思いや背景を踏まえ、それぞれに合った取組みの方法や進め方をともに考えていきたいと思います。

はたした
(畑下)



居場所

5-5

野菜提供ボランティアを通じての男性の居場所づくり



取組みの背景・課題

日中に集う場（体操・趣味の場・サロン）への男性の参加率は、一般的に低い。男性は、仕事中心の生活をしている間は、時間的に地域との接点が少ないことが多い。そのため、退職後に地域でつながりをもつきっかけが少なく、地域での住民同士の交流が難しい状況にある。



取組みの目的・ねらい

- 男性シニアの方が、趣味や得意を活かしたボランティア活動をおこなうことで役割を担い、畑を男性の居場所として、人との交流や地域とのつながりをもつことをねらいとする
- 人との交流を通じて社会参加の場が拡大し、介護予防・健康増進にもつながる



スナッフえんどうに霜よけ対策



内容・プロセス

男性の居場所づくりには「役割の明確化」が大切！

人々が地域で交流する居場所として、女性は体操・趣味・カフェ等への参加が多く、男性は防犯パトロールや登下校の見守り活動など、役割が明確な社会貢献の場への参加が多い傾向にある。

そこで、ボランティア活動をきっかけに男性の居場所づくりを検討し、ボランティア講座を開催。皆で野菜の栽培をして、やがて収穫。試食もしつつ、大半は区内の食育活動先へ野菜を提供。そうして、食育ボランティアや食事に訪れる人々を笑顔にする活動とした。

ここで注意すべき点は、皆で一緒に相談しながら、畑を耕し、野菜の種類を決め、日々の水やり当番を複数で行ないながら、人との関わりをもつこと。野菜づくりは手段であり、本来の目的は「男性の居場所づくり」である。

地元農家の休耕地を貸してもらえることになり、JA大阪市の協力も得られ、野菜づくりボランティア活動に興味・関心のある男性シニアを募ることができた。

事例概要

「男性シニアの居場所づくり」をめざして、野菜づくりをテーマとした講座開催、ボランティア・グループとしての組織化、活動支援をすすめている。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 「男性シニアの居場所づくり」という主旨について、地元農家やJA大阪市へ説明し、活動場所の貸与、野菜栽培の講師協力等を得て、講座を2回開催。男性シニアのボランティア活動者を複数発掘
- グループ化にあたり、会則づくりや助成金申請に関する支援
- 区内の食育活動先への収穫野菜の需給調整や、PRチラシの作成と周知協力

ボランティア講座修了者でグループ化し、活動継続！男性の居場所に

平成29年9月～12月「第1期共同菜園ボランティア講座」を開催。収穫野菜は、鶴見区内の食育活動先（区保健福祉センター「男性料理教室」や「こども食堂」）に無料で提供。

講座の修了者から引き続き“共同菜園ボランティア活動”をおこなう意志が確認できたことから、ボランティアのグループ化を区社協から提案。そして、平成30年4月に「鶴見区シニアボランティア アグリ」（以下、アグリ）という名称のボランティア・グループが誕生。グループとして、大阪市ボランティア活動振興基金を申請し、助成金が交付された。その助成金とグループの自主財源により、皆で相談しながら土づくり、野菜を栽培・収穫・提供活動を継続中。

平成30年4月～7月には、鶴見区社協主催、「アグリ」協力による「第2期 共同菜園ボランティア講座」を開催し、その修了者も「アグリ」へ加入。現在もボランティア活動希望者を随時受け入れながら、畑が「男性シニアの居場所」としても定着してきている。



大根の収穫



区内の食育活動先へ野菜提供

現時点での到達点（結果・効果など）

現在「アグリ」のメンバー13人で、PR活動や来年度の助成金申請・栽培計画を進め、主体的にボランティア活動をしながら、畑が「男性シニアの居場所」にもなっている。



生活支援コーディネーターとしての思い

男性シニアの居場所づくりをしていく上で、手段であるボランティア活動が楽しく続けられるよう、皆さんのコミュニケーションが円滑に進むよう、「アグリ」の役員を中心に働きかけ、活動の支援をおこなってきました。今後は、「アグリ」の主体的な活動を見守りながら、男性シニアの居場所としての広報活動へ、支援の向きを変えていきます。（安藤）



協議体

6-1

ワークショップを交えた協議体の開催



取組みの背景・課題

高齢者のニーズが多様化しており、既存の制度やサービスでの支援、個々の事業所での支援では、不十分または対応できかねないと感じている状況がある。



取組みの目的・ねらい

- ニーズや資源状況から課題を出し合い、さらに課題解決策を話し合うグループワーク等を実施することで、団体・分野を超えて、新たなサービスや活動を創出することをめざす。



内容・プロセス

第1回 高齢者の生活状況について意見交換

「高齢者の活躍の場を考える」をテーマにワークショップを実施。区内の課題を出し合い、そこから「こんな活動があればいいな」という理想を出し、最後に「具体的に実現に向けていくには」について考えた。高齢者の活躍の場を考えていたが、「買い物に困っている人がいる」「病院へ一人で行けない」「マンション住人との関係希薄」等の生活支援ニーズに係る課題が多く出た。その中から「買い物」についてキーワードを絞り、次回は区内にある資源について紹介することになる。

第2回 「買い物」にテーマを絞って議論

区内にある買い物支援に関する社会資源を「発送サービス」や「ネットスーパー」、「有償ボランティア」に分類し、



ワークショップの様子



ワークショップで出た課題と理想の社会資源

事例概要

既存の会議（高齢者支援のための情報共有や意見交換をおこなっている高齢者支援部会）を協議体の会議として、年4回（5月、9月、11月、3月）開催。構成団体は区役所や介護保険事業所、警察、消防、民生委員等多岐にわたる。地域課題の解決にはこんな資源があったらいいなという理想を出すワークショップを実施し、「買い物支援」について抽出。区内にある買い物支援をおこなっている資源を委員に紹介。今後、他事業と協働し、買い物支援について周知等を検討していくことを報告する。また、今年度発生した地震等における対応と課題の協議や、他市の事業を見学したことなどを報告し、意見交換を実施した。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- ファシリテーション役を務め、課題等の意見の集約をおこなう
- 課題にあげられた内容に対応する資源について情報提供をおこなう

紹介する。そこから意見交換し、「「福島お助けネットワーク」（有償ボランティア）の活動や、買い物支援をしていることを知らない方もいるのでは」という声があがったことから、福島お助けネットワークと協働して、今後、買い物資源マップ（案）の作成や、地域で開催される食事サービスやふれあい喫茶等で繰り返しチラシ等による配付・周知を検討していくこととした。

第3回 相次ぐ「災害」を受けて

大阪府北部地震、台風21号・24号の発生を受けて、その対応と課題について意見交換。「高齢者の安否確認者の重複、漏れが生じている可能性」や「利用者だけでなく職員等も被災し、安否確認できない可能性」などの課題があがる。今後、地震発生時等の安否確認について介護保険等事業所、地域、行政、区社協がともに仕組みを考えていく契機となった。

第4回 緊急時の「安否確認」への対応策を考える

在宅で暮らす高齢者の緊急時の安否確認への対応方法について、地域包括支援センターから課題を出されたことから、鍵預かり事業を実施している寝屋川市社協の見学を報告し、次年度の検討課題とすることなどを話し合う。

現時点での到達点（結果・効果など）

- ワークショップを通じて、気づきや課題等について協議し、テーマを3つに絞って情報共有することができた。
- 買い物支援に関する資源をリストアップし、紹介することができた。



生活支援コーディネーターとしての思い

多くの団体から参加していただいている中、話しやすい雰囲気になってきています。このような中で、顔の見える関係づくりや、委員との情報共有や連携を強めて、新たな資源づくりを進めていきたいと思っています。

（宮村）

※発行（令和元年8月）時点の生活支援コーディネーター：岡村



協議体

6-2

専門部会の設置、協議体 会議の「実務と協議の両立」へ



取組みの背景・課題

本事業の仕様書の「事業背景及び目的」に「地域包括ケアシステムの構築を進めていくうえでは…（中略）…4つの包括的支援事業が互いに連携しながら、一体的に取り組むを進めて行く必要がある」との一文から、生活支援コーディネーターは「本事業は包括的支援事業関係団体（地域包括支援センター、認知症初期集中支援チーム、在宅医療介護連携推進コーディネーター）への現状・課題などのヒアリングなしには進められない」と考え、ヒアリングを実施。その結果を協議体会議の構築へと反映した。

図1



取組みの目的・ねらい

- 包括的支援事業関係団体との連携体制の構築
→地域包括ケアシステムの構築への貢献
- 専門部会の設置、委員として協議体会議へ参画
→協議体会議が「実務」と「協議」を両立

図2:①

①身近な居場所の創出部会



「南西部地域包括支援センター地区ワークショップ」

- ・地域内の地域資源を把握し、不足する資源や地域を明らかにする。
- ・地域内のニーズアンケートを実施し対応する資源を開発する。



内容・プロセス

西淀川区では平成29年10月より事業がスタート。平成29年度は、協議体会議の構築に向けて、まず行政や地域包括支援センター、老人福祉センターなど関係者による準備会を開催。同時に包括的支援事業関係団体に現状・課題などをヒアリング。結果は準備会において共有し、専門部会の方向性や協議体会議のあり

図2:②

②有効活用ネットワーク部会



「西淀川区社会福祉施設連絡会役員会」

- ・社会福祉施設が地域貢献など何ができるか考える。
- ・連絡会にて活発な意見交換がなされるように内容を考える。

事例概要

介護保険の包括的支援4事業を中心に「課題」をヒアリング。その内容を大きく3つに分類し（図1）、区内既存の会議体に併せる形で「専門部会（図2:①・②・③）」を設置。「専門部会」の代表は「協議体会議」に委員として参加し、「実務」を報告することで直接的にその他の委員から「助言」を受ける仕組みを構築。「実務」と「協議」の円滑なサイクルをめざした協議体の構築に向けたネットワーキングを進めた。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 地域情報・ニーズ・資源の把握・分析
- 協議体の設置と開催

図2:③

方などを検討した。

平成30年度からは、専門部会をモデル的に発足させるための調整を進め、7月に最終の準備会会議を開催。以後、11月の協議体会議開催に向けて、各種会議や個別訪問により事業理解を求め調整を進めた。協議体会議には専門部会の代表も委員として参加することとし、11月の協議体会議で専門部会の承認がなされた。「実務の中心は専門部会であり、協議体会議において助言をしてほしい」ということを委員に求め、3月の協議体会議で実務についての検討・協議をおこなう予定である。

現時点での到達点(結果・効果など)

各専門部会会議の開催も軌道に乗り、議論を通じて実態調査や資源開発など協働の取組みが進められるようになっている。協議体会議において、各部会代表より実践の報告をすることで地域資源の開発に直接的に意見・助言を得る仕組みができた。

③在宅医療・介護連携推進事業区民啓発部会



「に～よん地域包括ケアシステム委員会区民啓発グループ」
・多職種の協働による効果的な区民啓発講演の企画実施。
・在宅医療や介護に関する啓発を小地域で行い浸透させる。

平成29年度	
12月	第1回「準備会」開催 (事業説明)
1月	南西部地域包括支援センター（認知症初期集中支援チーム兼） へヒアリング
2月	在宅医療・介護連携支援コーディネーターへヒアリング
2月	第2回「準備会」開催 (ヒアリング結果の共有・専門部会の提案)
3月	第3回「準備会」開催 (次年度事業計画の共有)
平成30年度	
4月	在宅医療・介護連携推進事業区民啓発部会スタート（図2:③）
5月	有効活用ネットワーク部会スタート（図2:②）
5月	身近な居場所の創出部会スタート（図2:①）
7月	第4回「準備会」開催 (協議体会議委員選考・最終確認)
11月	第1回「協議体会議」開催 (事業説明・専門部会の承認)
3月	第2回「協議体会議」開催 (専門部会の実践発表)



生活支援コーディネーターとしての思い

今後は、協議体会議において各部会の実践を後押しする意見が活発に交わされるよう、各部会において実践に関する報告内容や方法の検討を重ねるとともに、議論につながるデータ抽出のための事前調査を進めるなど、協働で改善しつづけることが重要だと考えています。

（中納）

※発行（令和元年8月）時点の生活支援コーディネーター：大山



6-3

多職種連携による 協議体の開催



取組みの背景・課題

区役所・区社協間で事前協議し、新たに職種を超えた協議体を立ち上げるようになった。区社協から地域住民へはたらきかけをするという理由で、現在、構成員として地域住民が入っていないことは課題となっている。



取組みの目的・ねらい

- 職種が違っていても共通する課題を検討する場となる。
- 構成団体間の横のつながりができた中で、高齢者の居場所や活躍の場を広く創出することは団体間の相乗効果が得られることが期待できる。



内容・プロセス

1 居場所の先にある支え合いの仕組みづくりへ向けた課題の整理

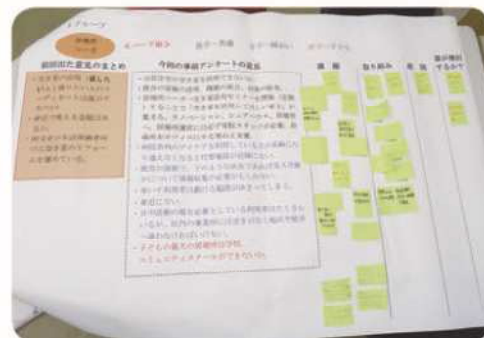
- 大阪成蹊大学・池田千恵子准教授に座長を依頼。
- 住民間の顔の見える関係づくりの先に支え合いの仕組みづくりがあるが、区内にはサロンをはじめ居場所となる場所が少ないため、「居場所づくり」を検討課題とする。
- 構成員へ事前アンケートを行い、各々が把握している居場所情報や、居場所づくりについて構成員や所属する団体でできることや課題などを聞き取り。



子育て・包括・見守り・社協のグループ



協議体は「こんな地域だといいな」を語る場



事業推進のヒントがいっぱい

事例概要

平成30年3月に新たに設置した協議体である。構成員は、区役所（高齢者福祉・地域協働まちづくり）、区内の大学・専門学校、高齢者・障がい者・子ども関係の相談機関・社会福祉施設・NPO法人や企業等多岐にわたっている。平成30年度末までに計5回開催。「居場所づくり」をテーマに会議前の事前アンケートと、当日のグループでの話し合いで議論を深め、会議で出た意見を事業に反映させている。構成員の所属する団体の特性を活かし、多様な切り口で事業を推進することは相乗効果を生むことが期待できる。

事例における生活支援コーディネーターの役割

- 区内の人口や高齢化率等のデータを整理して会議で提示
 - 事前アンケートや協議体会議で出た意見を整理し、次回の協議体へ向けて区と会議を行い、さらに会議前に座長（大阪成蹊大学の先生）と打合せをおこなう
 - テーマについて深める勉強会の調整
- 会議はグループでの話し合いを中心に進める。グループでの話し合いから、「居場所づくり」の①場所・内容②担い手③資金④情報発信の課題が出る。
- 「場所」の確保として、空き家の利活用について意見が出る。また、「担い手」不足が課題という意見が出された。

2 課題に対する勉強会

- 区役所担当職員から「東淀川区空家等対策アクションプラン」と「空き家の利活用の課題について」説明。
- 「サロン」について、竹村安子氏（元・大阪市立大学非常勤講師）と柳晴美氏（一般社団法人わいわい代表理事）による講演。



「サロン」講演で事業の方向性が見えました

現時点での到達点（結果・効果など）

- 民生委員児童委員地区委員長会で、空き家情報を教えてほしいというチラシを配布する動きにつながっている。
- 平成31年（令和元年）度、区内で開催する「サロン講座」に向けて協議体で検討していく。

生活支援コーディネーターとしての思い

協議体会議では多職種の方に自由な発想で語ってもらっています。多様な意見には事業推進のヒントが多くあります。担当者として、協議体の存在は区内全体で事業に取り組んでいるという心強さを感じています。

今後は地域にどう仕掛けていくかが課題ですが、本事業が高齢者の介護予防だけに留まらず、ソーシャルキャピタルの醸成や地域共生社会の実現にもつながればと思っています。

（佐村河内）



3 事例から見てきたこと



関西国際大学 教育学部 教育福祉学科

講師 岩本 裕子

【プロフィール】

1988年から通算して約15年間、大阪市社協（現：ボランティア・市民活動センター）のボランティアコーディネーターとして勤務。その後は関西学院大学大学院、同大学教員を経て昨年度から現職。

現在、大阪市生活支援体制整備事業有識者会議の委員、大阪市北区・住吉区・東住吉区社協のボランティア・市民活動センター運営委員のほか、神戸市や西宮市等でも行政・社協・地域包括支援センター職員の研修講師などを務めている。

今回の事例から浮かび上がった大阪市内の生活支援コーディネーターの実践とはどのようなものなのでしょうか。以下、大きく3つに分けて見ていきます。

(1) 「調査」というツール

(2) 参加と連携・協働

- ① 住民参加・住民主体
- ② 多様な主体との連携と多様な事業展開

(3) 第1層として

- ① 第1層協議体の役割と工夫
- ② 第1層としての情報発信

(1) 「調査」というツール

今回、「地域情報・ニーズ・資源の把握・分析」で挙げた事例を中心に、多くの事例でアンケート調査や、ニーズ調査をおこなっています。調査において地域福祉的視点で重要なことは、第一にどれだけその結果が住民のもの＝「我が事」となるかということです。それがなければ住民主体の地域活動は生まれてきません。調査は、課題を住民に押し付けるためのものではなく、住民参加、住民主体の重要なツールなのです。住民は、その人とあるいはその結果と“出会ってしまった”ことによって、ほっとけない存在として課題と向き合うことになります。その点において、例えば住之江区では住民とともに作成したり、阿倍野区では「おしゃべりの場」を把握の場としてきっちり位置づけ、住民参加によりおこなっています。

第二にそのプロセスを通して、関係を構築していくことができたかということです。住民同士のつながりはもちろんですが、淀川区での地域アセスメントの取組みのように専門職同士の連携も重要です。

第三に、その結果から導き出された目標が明確化され、住民や協議体としての共通目標となり、それをカタチにすることができているか（できつつあるか）ということです。「私たちの思い」がカタチになることをきっちり見せていくことが、次なる実践を生んでいきます。この点においては、**天王寺区**ではプリテストや発送前に地域への説明をおこなったり、**平野区**では道筋を明らかにし、男性グループや有償活動の立上げに結び付けることなどができています。

（２）参加と連携・協働

① 住民参加・住民主体

此花区のようにていねいなソーシャルワークによる実践、**西区**や**浪速区**、**旭区**、**大正区**のようにそれぞれのプログラムでの住民の主体性を育む工夫がみてとれます。**城東区**のように助成金など、具体的な目に見える支援をおこなっていくことも重要です。また、住民とひと口に言っても、その内実は多様です。地域の「見守りコーディネーター」や**北区**の「地域福祉コーディネーター」などのように、住民と専門職の間に位置する層と協働することで、より効果的な実践が展開できます。このことはまさに「社協の強み」であり、それを活かすことができている点も評価できます。

② 多様な主体との連携と多様な事業展開

都島区では「とくし丸」、**港区**では「ふれあいマルシェ」、**鶴見区**では「J A」というように「多様な主体との連携」や、**東成区**のきづくちゃん「たすけ愛」活動など多様な事業の展開がされています。

また、近年、社会福祉法人制度改革により「施設の地域貢献」は喫緊の課題となっています。生活支援コーディネーターの視点から言えば、その時流に乗り、うまく協働することが必要であり、**西成区**はそのチャンスを逃さず実践へとつなげることができています。

（３）第１層として

① 第１層協議体の役割と工夫

区レベルで作られている協議体においては、主体的に参画し合い、具体的に役割を担い合って何かを作り出していくことは容易でなく、その動き方には工夫が必要です。そのようななかで、**東淀川区**や**西淀川区**、**福島区**においては、新たに立ち上げることで動きやすくしたり、「専門部会」を立ち上げたり、ワークショップを開催するなどを通して意見を出やすくし、実りのある協議体へとつなげていく工夫がみられます。

② 第１層としての情報発信

住吉区や**東住吉区**での資源一覧やマップ作成、**中央区**での多様な媒体を活用した住民への情報発信などでその成果を見える化し、住民とともに享受することは重要です。同時に**生野区**の「地域のお宝発表会」のように、イベントという形で発信していくことで、区内の活動の全体像をつかみ、一つにしていったり、同じ志を持つ者同士や、普段出会うことがないであろう人々や組織が出会うことができる場を作ることは、第１層にこそ求められます。「住民の思い」を昇華していく、ソーシャルアクションの一つの方法と言えます。

■ 全体を通して（まとめ）

- （１）量では見えてこなかったリアリティ
- （２）社協の強みを意識して活かす
- （３）第２層に向けて

（１）量では見えてこなかったリアリティ

とにかく生活支援コーディネーターは立ち上げた居場所等の数で評価されがちですが、それもさることながら、“資源としての住民”ではなく、「ちゃんとみんなが主役で笑顔になるコミュニティ（仲間）づくりはできているのか」ということについても問わなければなりません。これをリアリティをもって知るには、事例という方法しかありません。どうすれば、どうしたからできるのかのもしかりです。その一つひとつに、どのような人々がどのような思いで関わり、生活支援コーディネーターは専門職としてどのような意図をもってどのように動いたのか。そこから見えてくるリアルな実践を、立ち止まり、プロセスをていねいにまとめてふりかえり、評価することは、数字では推し量ることのできない、生活支援コーディネーターのあり方を検証し、明日へつなげる確かな一歩となります。

もちろんすべてよいことばかりというわけではありません。しかし、見てきたようにできていることもあることを、こうしてたくさんあげることができます。

（２）社協の強みを意識して活かす

社協は住民に一番近い存在として、行政では直接組みにくい多様な主体との連携や事業を展開していくことができます。また、組織内連携による包括的な取組みなど、社協の強みを活かした実践が期待できます。

特に、全区にあるボランティア・市民活動センター（ボランティア・ビューロー）は、社協組織の中でも、もっとも区民にオープンにされている参加と協働のチャンネルです。そして、連携・協働・資源開発といったミッションは、生活支援コーディネーターのミッションとも重なります。地域活動は、一般化された課題に対しては得意ですが、少数派や先駆的な課題は不得手です。より主体性をもったエリアに捉われない、テーマ型の活動と組み合わせていくことで、区レベルの多様な取組みや小さくてもモデル的な取組みなど、その可能性が広がります。

（３）第２層に向けて

現在は、第１層のみに生活支援コーディネーターが配置されているために、第１層的な実践と、第２層的な実践とが入り混じっています。今後は、第２層も視野に入れた実践の絵を描いていく必要があります。今までの実践（事例）を、第２層としておこなっていくべきもの、第１層としておこなっていくべきものに整理したうえで、そのノウハウを蓄積し、成果を上げ、それを発信していくことが望まれます。そのためにも、EBP（エビデンス・ベースド・プラクティス／根拠に基づいた実践）をベースに、ソーシャルワークのサイクル（地域アセスメント→プランニング→実践→モニタリング→評価→アセスメント・・・）を意識した実践をしていく必要があるでしょう。

大阪市・区社会福祉協議会 一覧

社 協 名	所 在 地	電 話
北 区 社 協	大阪市北区神山町 15-11	06-6313-5566
都 島 区 社 協	大阪市都島区都島本通 3-12-31	06-6929-9500
福 島 区 社 協	大阪市福島区海老江 6-2-22	06-6454-6330
此 花 区 社 協	大阪市此花区伝法 3-2-27	06-6462-1224
中 央 区 社 協	大阪市中央区上本町西 2-5-25	06-6763-8139
西 区 社 協	大阪市西区新町 4-5-14	06-6539-8075
港 区 社 協	大阪市港区弁天 2-15-1	06-6575-1212
大 正 区 社 協	大阪市大正区小林西 1-14-3	06-6555-7575
天王寺区社協	大阪市天王寺区六万休町 5-26	06-6774-3377
浪 速 区 社 協	大阪市浪速区難波中 3-8-8	06-6636-6027
西淀川区社協	大阪市西淀川区千舟 2-7-7	06-6478-2941
淀 川 区 社 協	大阪市淀川区三国本町 2-14-3	06-6394-2900
東淀川区社協	大阪市東淀川区菅原 4-4-37	06-6370-1630
東 成 区 社 協	大阪市東成区大今里南 3-11-2	06-6977-7031
生 野 区 社 協	大阪市生野区勝山北 3-13-20	06-6712-3101
旭 区 社 協	大阪市旭区高殿 6-16-1	06-6957-2200
城 東 区 社 協	大阪市城東区中央 2-11-16	06-6936-1153
鶴 見 区 社 協	大阪市鶴見区諸口 5-浜 6-12	06-6913-7070
阿倍野区社協	大阪市阿倍野区帝塚山 1-3-8	06-6628-1212
住之江区社協	大阪市住之江区御崎 4-6-10	06-6686-2234
住 吉 区 社 協	大阪市住吉区浅香 1-8-47	06-6607-8181
東住吉区社協	大阪市東住吉区田辺 2-10-18	06-6622-6611
平 野 区 社 協	大阪市平野区平野東 2-1-30	06-6795-2525
西 成 区 社 協	大阪市西成区岸里 1-5-20	06-6656-0080
大 阪 市 社 協	大阪市天王寺区東高津町 12-10	06-6765-5606

◆ 各事例の執筆・写真提供は各区社協によるものです。

◆ 事例は平成 31（2019）年 3 月時点の内容を基本として作成しています（一部事例を除く）。

協力 大阪市福祉局(高齢者施策部 高齢福祉課)
関西国際大学 講師 岩本裕子